
雨に歩けば

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨に歩けば

【Nコード】

N1223R

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

雨の中、ドナルド・フェイゲンの歌声が聞こえる。

遠雷が聞こえる。蒼天が急にかきくもった。墨汁を垂らしたような曇雲が地平線までいっぱいに伸びると街路が翳り、大粒の雨が降ってきた。

「さっきまで、あんなに晴れてたのにね」

俊介と同一年のマスターが、まだ片付いていないカウンター内の食器を整理しながら、外をちらりと見てつぶやく。

店が面している交差点は、カバンや上着で雨をよけながら走る人びとが行きすぎると、路上を涼しげに走る車以外、すぐに人気がなくなつた。

養生材のテープがところどころに残る、ま新しいチーク材のカウンターにもたれて座っていた俊介も、街路を一瞬だけ見やると、マスターに向き直り、いたずら猫のような目で言った。

「哲ちゃん、そろそろいいだろ、開店祝い。乾杯しようぜ」

「開店祝いじゃなくて、ヤケ酒じゃないの？」哲ちゃんと呼ばれた若いマスターは、静かな色を目に湛え、やさしく笑いながら、グラスを二つ出してきた。

「なに言ってるの！ 大きなお世話」俊介は苦笑いし、大声で強がった。

「それより、若くして店を持った、哲ちゃんの成功を祝福する方が大事だろ！？」語尾のトーンの微妙な下がり具合に、本当は素直で気弱な性格が覗く。「おれのことはいいの。せっかく学校サボって来たのに、開店第一号の客を粗末にしているの？」

「了解、了解」俊介の強がりやを、マスターはよく知っている。彼はまだ品揃えの少ない冷蔵庫から五百ミリリットルのギネスを一本出すと、二つのグラスに注いだ。

チョコレートのような滑らかな液体が、綿菓子のようにきめ細かな白泡を載っている。

二人は、乾杯した。

哲也は小さなアンプに近づき、スイッチを入れた。

四ビートのオルガン、それに続くベースの響きが広い窓に囲まれた店内を包む。

「『雨に唄えば』だっけ？」

「『雨に歩けば』、ね。」マスターはちよつと笑って二口めを口に含み、外を眺めた。「『雨に歌えば』はジーン・ケリーのほう」

「あつ、そう」気のない返事を吐き、俊介は布製バンドの時計を眺めながら訊く。「……誰だっけ？」

「ドナルド・フエイゲン」

知らないなあ、そう言い捨て、俊介はグラスを空けると、また時計を眺め、携帯を眺め、交差点を眺める。

「ところで三つめのグラスは、いつ出せばいいの？」二本目を取り出しながら、マスターは意地悪っぽく言う。

「もうすぐだよ、出しといて！」ふてくされて俊介はグラスをカウンターに置いた。

「グラスを冷やしてる以上、出すタイミングがあるから。確証がなけりゃ、出せないよ」自身も一杯目を空け、マスターは言う。

「哲ちゃんも、ホント性格悪いよな！」泣きそうな顔をし、カウンターにうつ伏せ、俊介はまた携帯を見た。

「お互い、意地っ張りだからな」マスターは独り言のようにつぶやく。

「……けどさ、哲ちゃん、偉いよな」三本目を開けたころ、酔いが回りはじめた俊介が眠たそうに言う。外は本降りが弱まり、傘をさす人が街路を歩きはじめていた。交差点の信号の明滅が窓を伝う雨だれに、美しくゆがんでいる。

「何が？」マスターもオールバックの額を少し赤らめ、カウンターに肘をついている。

「一緒にバイトしてた頃だから……まだ……」

「十八歳？」

「そう、十八歳のころから、開業したい、って夢があったわけだろう？」

「うん」

「その夢を、二十歳そこで叶えちゃうんだからさ」

「自分の店が持ちたかっただけだよ」

「おれなんて、来春からしがない勤め人だよ」

「それだって、自分で選んだ途だろ？ それに勤め人だって、不安定なフリーの立場の人間から見れば、ある意味うらやましい身分なんだよ」

「十人十色、ってわけね」酔った俊介が、腕を枕にし、力なく通りを眺める。

「人間万事、塞翁が馬、とも言うね」マスターもやさしく言う。

雨がしのついている。ドナルド・フェイゲンが唄う。

♪君は傘をさした

俊介はすっかり酔いつぶれ、マスターは静かにグラスを口に運んでいる。

「夕立ってさ……街を静かにさせるよな」俊介は、半分まどろんで呟いた。

その時

俊介の携帯が鳴った。

「来た！」俊介はものすごい勢いで飛び起きる。

交差点に目をやる。

裕美が傘をさし、立っていた。

戸惑いと怒りをたたえた複雑な表情で、けど優雅に、雨の中を歩いてくる。

マスターは嬉しそうに、三つ目のグラスを取り出す。

ドナルド・フェイゲンが、唄う。

♪僕らは歩いた、雨の中を……

蒼天がかきくもり、夕立が降ってきた。遠雷の音が聞こえる。

ドナルド・フェイゲンの歌声が遠くで聞こえる。

俊介は、自身の腕枕の中から飛び起きた。

「だいたい寝てたね」

白髪混じりのオールバックを照明ににぶく照らし、マスターはグラスを拭いている。

「ああ。ごめん」すっかり薄くなった頭をかき、俊介も赤く泣きはらした目をこする。「寝ちまってた……」

目の前の、手垢にまみれたカウンターにはすっかり気の抜けたギネスが置いてあり、ドナルド・フェイゲンの歌が流れている。

「憶えてる？」俊介は唐突に訊ねる。

「何を？」

「哲ちゃんの開店祝いの日……」

「もちろん。もう何十年も前だもんな」遠い目をして街路を眺める。リニア駆動の乗り物が、全く路面の水を撥ねずに、酸性の雨にけむる街路を行き来する。人はほとんど外を歩かなくなった。

「あの日も、こんな夕立ちだったね」

「うん。客は俊介とぼくしかいなかった」

俊介は店内を見回す。今日は俊介のほかに若いカップルが一组、あとは俊介たちより少し若そうなサラリーマン風の男性が一人だけ。

「そう。そして後から、裕美ちゃんが加わった」

マスターも懐かしそうに、拭きかけのグラスを眺める。

「おかげさまで、あの後ここで式まで挙げさせてもらって」一瞬、言葉に詰まる。「哲ちゃんには、感謝してる」

俊介は若いカップル客を微笑ましく眺め、ぬるいギネスをあおった。灰色の立派な口ひげに、泡が少し付く。

「ずいぶん、分別くさくなっちゃったなあ」マスターがいつものように悪戯っぽく微笑む。目じりには無数の笑い皺がある。他の一人の男性客が、横からウィスキーを注文する。

「もっと早く、気づいてやればなあ……」俊介は金色に輝く腕時計をはめた腕を枕に、外を眺める。

マスターのグラスを拭く手が一瞬だけ止まる。

「別に、俊介のせいじゃないよ」

「いや、おれが彼女の兆候を見抜いてやれなかったせいだ！ もっと早く気づいてやればなあ……医学の進歩なんて、くそ食らえだ」
「もうやめようぜ」マスターは珍しく声を荒げた。

俊介も、黙る。雨音が店内に染み入ってくる。

「俊介は、本当によくやったよ。彼女を幸せにした」拭いたグラスを置くと、また優しくつぶやいた。「彼女も、天国で喜んでるよ」

「あの世でも、彼女に会えるかな」

「会えるさ。けど、まだ先の話な。ここにいるおれたちは、生きている限り生きてかなくちゃいけない」

「『生きてる限り生きてく』、って、哲ちゃん……変な表現だな」
ようやく俊介が笑った。

「そうか？」マスターも笑う。

「なあ」ギネスを飲み干し、しばらくして俊介は改まった。

「うん？」カップルのカクテルの注文をさばきながら、マスターは返す。

「哲ちゃんは、どうして結婚しなかったんだ？」

無言のまま、マスターは落ち着いた笑みを崩さない。

「お客とかでさ、何人もいたじゃない？ 哲ちゃんに惚れてた子とか」

「独りが好きな人間だって、世の中にはいるというだけだよ」泰然と、マスターは答えた。

「ふん……」ふてくされたようにちよっただけ笑い、俊介は再びまどろみはじめた。「十人十色、か……」

「そう、人生、十人十色」マスターも微笑んで、通りを眺めた。

ドナルド・フェイゲンが、唄う。

♪僕らは歩いた、雨の中を……

ドナルド・フェイゲンが鳴っている。

やはり、外では夕立の雨音が続いている。

俊介は、再び目覚めた。

とてもすがすがしく澄みきった気もちが、心を、身体じゅうを満たしている。

俊介は、ゆっくりと周囲を見回す。カウンターがピカピカで、内装も、開店当時のように新鮮に輝いている。客は他に誰も居ず、店内は不思議なほどに静まり返っている。

「お帰り」マスターの声が聞こえた。

布製の時計のある腕に載せていた頭を上げると、開店当時の黒髪のままのマスターが、ハリのある顔でグラスを三つ、出してきた。

「長い夢、みてみたいで……」俊介は、夕立の降りこめる、“いつもの”通りを眺めた。人の気配も、車も、何もない。ただ街路が、夏の暮れの濃厚な雨に打たれているだけ。

「人生なんて、長い夢みたいなものだよ」マスターも、不思議な静寂に満ちた通りを眺め、ギネスを注ぐ。

「先に来てたんだね」グラスに注いでもらいながら、俊介はひとりごちた。

「これだけは、変わらないな」返事の代わりに、マスターは冷えたギネスの入ったグラスを掲げる。

二人は、乾杯した。

「哲ちゃん、お疲れ」俊介は改めてマスターに杯を掲げた。

「お疲れさま」噛み締めるように、マスターも応え、グラスに口を付ける。

あの当時の携帯が、手元に現れた。

メールが入る。裕美からだ。

「そろそろだよ」マスターがああ悪戯っぽい笑みを浮かべて俊介に言う。

「ドキドキするな」

「あの頃と、変わらないな」

二人は交差点を、見つめる。

裕美が立っていた。雨傘を持って。当時のまま、きれいだ。

「これから」俊介は、喜びを顔いっぱいには浮かべて言う。「また一緒だ」

「永遠に」マスターも、嬉しそうに三つめのグラスにギネスを注いだ。

裕美は交差点から、歩いてくる。

今は満面の笑みをこちらに向け、足取り軽く。

俊介は、再びつぶやいた。「二人で、ずっと歩いてく」

ドナルド・フェイゲンが、唄う。そして、最後のコーラスに入る。

♪ 僕らは“歩いてく”、雨の中を……

(後書き)

本日(2011年2月22日)、書き上げた新作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1223r/>

雨に歩けば

2011年2月22日21時40分発行